

令和3年度教育事業  
そにとつとキャンプ  
～出会いのキャンプ～



1. ねらい

- ・新しい仲間と出会い、親交をもつ。
- ・みんなで協力する気持ちを培う。
- ・やり遂げることの喜びを感じる。
- ・自然（光、風、水、草木）を体感する。

2. 実施日

6月12日（土）～6月13日（日） 1泊2日

3. 対象者

発達障害のある小学校3～6年生

4. 参加者 / 募集定員

12名 / 12名

5. プログラム（要約）

「そにとつと」のキャラクターを活用した、ストーリーキャンプを行った。活動全体においては絵カードや「そにとつと」からのメッセージ動画を用い、活動の流れを子どもたちに示し、見通しをもって活動できるようにした。また、「キャンプのやくそく」により具体的な行動を示し、キャンプリーダーのサポートを受けながら初めて出会う仲間と協力し、スモールステップで達成感を積み重ねた。

スケジュール

6月12日（土）1日目

- 「はじまりの会」
- 「そにとつとウォークラリー」
- 「ナイトハイク」
- 「ふりかえり」

6月13日（日）2日目

- 「野外炊事」
- 「ふりかえり」
- 「おわりの会」

6月12日（土）

「チームそにとつと」として、国立曽爾青少年自然の家が集まった12人の参加者は、「そにとつと」からのミッションDVDを視聴し、今回のキャンプでのめあてを確認した。はじまりの会の後、「となりのとなり」など、ゲームを通してアイスブレイクを行った。

その後、班ごとに7か所のポイントを探しながら自然の家各所を巡る「そにとつとウォークラリー」に出発した。班の仲間と声をかけあい、協力してアスレチックで遊んだり、実際に薪割りをしたりしながら、キャンプのリーダーや友だちとの関わりを深めていった。ウォークラリーの途中には、宿泊棟に入ってベッドメイキングをするミッションなどもあり、楽しみながら施設を知ることができた。

夜は、「ナイトハイク」を行った。お亀池周辺を散策し、自然の家に戻ってくるコースをたどったが、日中とは違い、暗闇の中を慎重に進んだ。山の斜面には野生の鹿もいて、子どもたちは驚きつつも喜んでいった。



6月13日（日）

2日目のミッションとして、野外炊事でちゃんこ鍋作りを行った。各班でカマド係と調理係に分かれて作業を進めた。自分が担当する仕事が一段落した子どもたちの中には、進んで鍋や調理器具の洗い物をしたり、かまどの掃除をしたりする子もいて、スムーズに活動が進み、予定よりも早く野外炊事を終えることができた。その後のふりかえりでは、キャンプのプログラムを思い出しながら、それぞれの頑張ったことを模造紙に書き起こすことで確認し合い、それを踏まえて次の冒険のキャンプに向けた目標を各班で話し合った。

6. まとめ

新型コロナウイルスの影響で、マスクや手洗い、消毒の徹底、3密の回避などの感染症対策をとりながらのキャンプであったが、参加者はそれぞれに「ミッション」を乗り越え、リーダーや同じ班のメンバーとのコミュニケーションを深めた。

時には同じ班の仲間と意見が合わず、感情のコントロールがうまくできずに話し合いに参加できない場面もみられたが、次回の「冒険のキャンプ」では、さまざまな「ミッション」をみんなで乗り越えることでより大きな達成感が味わえるようなプログラムを準備したい。

（企画指導専門職 福島 茂樹）

令和3年度教育事業 そにととキャンプ  
～冒険のキャンプ～



1. ねらい

- ・冒険的なプログラムをやり遂げることで達成感を感  
じる
- ・協力することの大切さを実感し、社会性を養う
- ・成功体験の積み重ねを通して自己肯定感を養う
- ・保護者同士の子育てについての意見交流を図る

2. 実施日

9月19日(日)～9月20日(月・祝) 1泊2日  
※台風14号の影響により日程を短縮して開催

3. 対象者

発達障害のある小学校3～6年生とその保護者

4. 参加者

児童：10名、保護者：11名

5. プログラム(要約)

「出会いのキャンプ」で共に過ごした仲間と再会し、前回よりも難易度の上がったミッションに挑戦した。

1日目は登山に挑戦し、お互いに声をかけ合いながら岩場を乗り越え、山頂からの眺めを楽しんだ。夜はキャンプファイアールを行い、親睦を深めた。

2日目は1人での火おこしに挑戦した。それぞれのカマドで自分が選んだ方法で火をつけ、大きくなっていく火を眺めた。

保護者プログラムでは、発達特性の理解や子育てに関する講義、ワークショップが行われた。

スケジュール

(参加者)	(保護者)
9月19日(日) 1日目	9月19日(日) 1日目
「はじまりの会」	「はじまりの会」
「亀山登山」	「子どもの特性」
「キャンプファイアール」	「特性をまとめる」
「ふりかえり」	「特性の理解と対応」
	「保護者の会の紹介」
9月20日(月) 2日目	9月20日(月) 2日目
「ひとりで火おこし」	「ペアレント研修会」
「ふりかえり」	「学びを考える」
「おわりの会」	「おわりの会」

児童プログラム

9月19日(日)

台風14号の影響により、そにととキャンプ～冒険のキャンプ～は1日遅れてのスタートとなった。参加者たちは久々の再会を喜び、アイスブレイクを終える頃にはすっかり前回の雰囲気を取り戻していた。

1日目はメインプログラムとして、亀山登山を行った。参加者たちは道中の岩場を慎重に登り降りし、手や足をかける場所を教え合ったり、互いに励まし合ったりしながら前進していった。山の中腹では、そこから見えるものを題材に、紙とクレヨンで表現する時間をとった。参加者たちは、遠くに見える風車を見つけて絵を描いたり、その時に感じたことを俳句で表現したりしていた。

夜はキャンプファイアールを行った。参加者たちはボランティアリーダー主導のゲームで親睦を深めていた。その後班ごとのふりかえりを行い、キャンプ場にてテント泊をした。



9月20日(月)

2日目は自分ひとりだけで火をおこすプログラムに挑戦した。参加者は薪割りから薪組み、火付けまでを自力で行い、自分が育てた火をのんびりと眺める者や、更に薪をくべて火を大きくする者もいた。火をつける道具はファイアースターター、マッチ、ライターの中から選べるようにした。特にファイアースターターを選んだ参加者は、なかなか火がつかず苦労していたが、あきらめずに何度も挑戦していた。

キャンプのふりかえりでは、参加者同士が「旅立ちのキャンプ」での再会を約束した。



保護者プログラム

地球元気村自然学校校長の奥田博氏、曾爾村立曾爾小中学校元校長の吉田昌功氏を講師として迎え、講義が行われた。

キャンプ初日の奥田氏によるアイスブレイクでは、それぞれが自分の趣味や好きなことを話す時間があり、打ち解けやすい雰囲気ができた。その後、発達に特性のある子どもたちの特徴や行動原理、対応などについて講義を受けた。途中、保護者の中からは、子ども

ものこだわりやかんしゃくを起こしたときの気持ちの整理の仕方についてなど、質問が出ていた。また、過去のそにっとなンブ参加者の現在の姿や、保護者の活動の様子について、スライドショーを交えながら紹介があった。

2日目は、吉田氏から子どもたちの認知や行動の分析についての講義が行われた。子どもたちの行動の裏にある「見えない部分」を見抜こうとする考え方について、保護者も熱心に聞いていた。

子どもたちがキャンプの振り返りをしている時間に、保護者達は班についていたリーダーから、2日間のそれぞれの子どもたちの様子や頑張っていたところを聞いた。話の中に普段一緒に過ごす中では見られない姿がたくさんあったようで、驚きや感動とともに話を聞いていた。

## 6. まとめ

日程の短縮があったことで、内容が大きく変わってしまったプログラムもあったが、参加者たちは一つのプログラムに一生懸命取り組み、何かをやり遂げたときの達成感や、成功体験の積み重ねができたようであった。

参加者からは、「火おこしが楽しかった」「山登りでヘトヘトなときに助けてもらった」「また来たい」といった感想があった。保護者からは、「心にせまる話をたくさん聞いて良かった」「自分の子どもとの接し方を見直すいい機会になった」といった感想が挙げられた。

台風による日程短縮の影響から、今回のキャンプのプログラムは個々で取り組むものが多くなってしまった。次回のキャンプでは、共通の目標のために参加者全員で協力しながら取り組めるようなプログラムを用意し、参加者同士のつながりを強めていきたい。

(企画指導専門職 山内 康平、福島 茂樹)



令和3年度教育事業  
そにとキャンプ  
～旅立ちのキャンプ～



### 1. ねらい

- ・仲間との再会を喜び、最後のキャンプを共に過ごす
- ・これまでの体験を通して得たもの、成長したことを再確認する
- ・ふりかえりを通して自己肯定感の再構築を行い、これからの生活の新たな目標を持つ

### 2. 実施日

12月11日（土）～12月12日（日）1泊2日

### 3. 対象者

発達障害のある小学校3～6年生

### 4. 参加者 / 募集定員

11名 / 12名

### 5. プログラム（要約）

今年度のそにとキャンプの集大成として、「参加者同士のつながりを強くする」ことを意識したプログラムを用意した。

1日目は写真を頼りに敷地内各地を巡る「そにとテーリング」を行い、それぞれの場所で課されるミッションに挑戦した。

2日目は野外炊事を行った。1日目のプログラムをクリアして得た材料を使ってクリームシチューを作った。

### スケジュール

#### 12月11日（土）1日目

- 「はじまりの会」
- 「そにとテーリング」
- 「そにリンピック」
- 「1日のふりかえり」

#### 12月12日（日）2日目

- 「野外炊事」
- 「キャンプのふりかえり」
- 「がんばったこと発表会」
- 「おわりの会」

### 12月11日（土）

前回のキャンプからおよそ3カ月経ってからの再開であったが、参加者はそんな時間を感じさせないほどすぐに打ち解け、再会を喜んでいた。

1日目のプログラムとして、自然の家の敷地内にあるポイントを、写真を頼りに探しながら、それぞれの場所で課される課題をクリアしていく「そにとテーリング」を行った。課題をクリアすることで、翌日に行う野外炊事の材料カードが1枚ずつ手に入るようになっている。どの課題も班のメンバーと協力したり、意見を出し合ったりしないとクリアできないようになっており、自然と参加者同士のかかわりの機会ができていた。

夜はプレイホールで「そにリンピック」を行った。班ごとに「玉入れ」、「ボウリング」、「ノーハンド風船運び」の3つを行い、楽しみながら体を動かした。



### 12月12日（日）

2日目は野外炊事でクリームシチュー作りを行った。参加者は前日に手に入れた材料カードを本物と引き換え、調理担当と火おこし担当に分かれて作業にあたった。これまでのキャンプすべてで火おこしをしてきたこともあり、大変スムーズに作業を進め、どの班も自分たちが作ったシチューに舌鼓を打っていた。

最後に、これまでのキャンプ全体をふりかえる時間を設けた。参加者はそれぞれ自分が頑張ったことややることができるようになったことを話し合い、今後の目標や展望を「がんばったこと発表会」で1人ずつ発表した。



### 6. まとめ

1年間を通して、新型コロナウイルスの感染拡大防止策をとりながら行ったため、活動が制限される場面も多かった。しかし、参加者は時には一人で、時には協力しながら、一生懸命プログラムに取り組み、楽しみながら活動していた。どのプログラムでも意見を出し合い、意思決定をしながら取り組む姿に、社会性や自己肯定感の高まりを感じることができた。

（企画指導専門職 山内康平）